



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeiki@kib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

大道芸人

現在もそうだが、明治時代も道路や広場で大道芸をする
 ことには規正が多かった。とりわけ明治初期は、文明開化
 とやらのお蔭で「外国人に対して恥ずかしい、みつともない」
 と矢鱈に禁止された。そのため、藩政時代にはあれほど盛
 んだった大道芸が、みるみる姿を消した。

それを惜しんだ根本吐芳と言う人が、『新小説』明治三十
 三年八(一九〇〇)二月号へ大道芸人について書いている。一
 部は、拙著『日本大道芸事典』に紹介したが、仕切れな
 ったものを中心に改めて紹介する。

大道芸人

根本吐芳

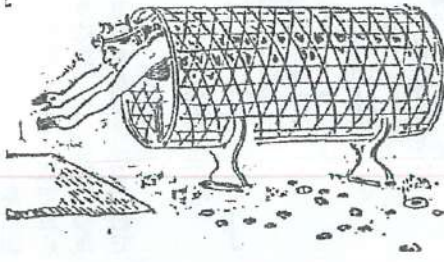
今のやうに道路取締規則と芸
 人に対する規定が厳重でな
 った予が幼少の時分には、路
 上にいろいろ面白いおかし
 寧ろ怪しい技芸が演じられ
 者である。その大道芸人の内
 には、随分多くの種類があ
 て、単に演芸ばかりを以て
 を得るを目的とするのがあ
 ば、又飴菓子其他の物品を

らんがために技芸を演じた
 のもあつた。浅草の奥山や
 両国の広小路や上野の山下
 や門跡(築地本願寺)の地内
 や芝口や、最も人立の多い
 場所を選んで一定して居た
 のもあれば、東京市中を町
 から町と歩いて居たのもあ
 る。彼らの演芸には小屋と
 いふものを設けない、だか
 ら予め観覧料を木戸で徴収
 するといふやうなことは無
 論出来ない。見物するもの

随意なら観覧料を出さうとふ姿であつたと思ふ。相手
 出すまいと又売物を買はうにする子供も同じやうな姿
 と買ふまいと矢張り随意なで、種々雑多な芸をしたが、
 ので、斯くの如くにして、目に残つてゐるのは今でも
 集散常なく報酬定まりなき折々見せられる繩脱け、人
 見物、所謂お立合なる皆様間を縄で縛し風呂敷を被
 に対して彼等は技芸を演じて置く内脱けるので、その
 ののである。(中略) 先づ第一に本芸とも云ふべきは
 「獨角力」(ひとりつば) 縄が明治十年頃出来てゐて大
 中と分けて害物を置く。蠟燭に火を点し
 「歯力」(はしり) 読んで字の如く、台の上へ装置し、
 派の力をみせたのである(略) 分が四斗樽の籠ほどの
 持つて子供に脱けさせる、方々を自分に向け此上を
 「らうそくや」

豆蔵といへば奥山で有名な
 ので、手品をつかひよく饒
 舌る男であつたさうな、又
 籠松といつて、同じく奥山
 籠脱けの芸をして居たのも
 あつたといふが、是が維新
 前のことで、予が覚えてか
 らは、らうそくやといつて、
 豆蔵と籠松を一緒にしたや
 うなものがあつた。浅草の
 仲見世から仁王門入つて
 左へ行くとも今も広げば
 ある、此処へ必ず出でゐた
 もので、囃子方か何かを入
 れて五六人、いろいろ小道
 具を使つて鳥渡大掛かりに
 見受けられる。全体らうそ
 くやとはどういふ所から
 た名前だか解らない。或い
 は以前蠟燭屋であつたの
 も知れない。目の鋭い余程
 人相の善くない男で、シャ
 の上に首縞の腹掛股引とい

籠脱け (『新小説』)



居合抜

(『風俗画報』)



くやといふ所から来れば、
 天保下すつたよと草の公
 園に「居合抜」といふ
 のが出てゐるが、是は長
 兵衛の「居合抜」後の幕
 天の「長」